

浜口梧陵紀徳碑（銚子市）と肖像



紀伊・房総

くろしお物語

◇31◇

銚子が「しょうゆのい、温暖で湿潤な地理的条件の他に、崎山治しょうゆ醸造業が発展したの、発酵しやす港や江戸の人口増加と

相まって、徳川家康の進させたのではないかと私はみたが、どうでる銚子の物流拠点の充実などの経済的条件が背景にあったと思われる。更に外川港の開港で紀州漁民が増加し、故郷の湯浅醤油の味を銚子で味わいたいという影の音が進出を促

1645(正保2)年、浜口儀兵衛の祖は紀州広村より現在の銚子市新生町にてしょうゆ醸造を始め、やや遅れて岩崎重次郎の祖も銚子に移住して製醬の業に従事した。他に9醸造家などあったが、1755(宝暦4)年、既に紀州人がりー

浜口梧陵はしょうゆ醸造に精励する傍ら、幕末の大先覚者だった佐久間象山や勝海舟など久間象山や勝海舟などと国事を憂い、子弟の教育の場を作った。また1854(安政元)年の大津波では稲むらの火で村人を救ったこととは今もって教科書にも載る有名な話である。明治維新にあたっては最初の和歌山県議会議長として県政の円

満遂行を図るなど、常に眼を世界に注いだ経世家であった。忘れてはならないのはあと一つ、銚子をコレラから救ったことである。58(安政5)年、江戸を中心にコレラが流行し猛威を振るい始めたころ、江戸支店にいた梧陵は店の支配人と銚子の開業医寛齋に「目下、江戸で猛威を振るっているコレラは早晩銚子方面にもまんの地震が急に現実味を延するに違いない。予

コレラから銚子を救った浜口梧陵

絵と文・熱田親憲 題字・熱田泰華

流行見越して予防策

ドして6733石もの醸造高を有していたようだ。

紀州人の経営の柱が利益のみならず社会事業への参加であることに注目したい。その最たる例が醸造家の消防隊である。大正時代まで自治体消防署がなかった町に、市民から当てにされる存在となり、消防隊は時代の先取りをし、社会的責任を果たした。

浜口家七代目当主の